

(2) 思春期診療科

概要、特色

(a) 概要

国立成育医療センター開設に伴い、従来の縦割り診療体系ではなく全人的な診療を目指して総合診療部が設置された。思春期診療科は小児期診療科、成人期診療科と共に総合診療部に属し、思春期年齢を中心におこる疾患や生活上の問題などに取り組む診療科と位置づけられている。

(b) 特色

思春期は小児から成人への重要な橋渡しの時期であり、心身両面において成長と共に成熟が始まり、完成する時期である。思春期の定義については議論があるが、一般に二次性徴が進んでくる10歳から成長と成熟が完了する20歳までと言われている。思春期診療科ではこの前後プラス2年程度の幅を持たせた年齢層を診療対象と考えている。

自我自立の葛藤など、精神的にも支持が必要な時期であるために、診療は思春期心理科とのチーム医療が必須である。また、二次性徴の問題から婦人科・泌尿器科との連携も適宜行っている。このように、当センターの基本理念の一つである、患者に最適なチーム医療の提供を心がけている。

診療活動、研究活動

(a) 診療活動

思春期診療科の現在のスタッフは2名。この他総合診療部レジデント及びこころの診療部レジデントと共に病棟診療を行っている。一部レジデントが病棟での臨床研修を経た後、外来診療にも参加するようになった。

思春期診療科の対象疾患は、二次性徴の異常（思春期早発症、思春期遅発症）、性分化異常症、成長障害、近年増加している思春期の性の問題、摂食障害、肥満・糖尿病などの生活習慣病、慢性疾患の骨塩量低下の問題などである。

外来診療： 外来診療としては、一般総合診療外来のうち4枠をスタッフ2名が担当している。思春期診療科としては、平成14年6月より毎月第2・第4月曜午後に思春期外来を行っている。この外来は思春期年齢を中心に、主に性の分化と成熟異常、摂食障害、慢性疾患の成長障害と性腺機能低下や骨塩量の低下の問題を扱い、思春期心理科・婦人科との合同外来である。心の問題の身体化を連携して扱うと共に、思春期年齢の婦人科疾患患者がスムーズに婦人科を受診する窓口にもなっている。思春期外来患者数と疾患内訳を表に示した。

また、同時期より毎月第1金曜日午後に糖尿病外来を、第3金曜日午後に生活習慣病外来を設け、前者では1型糖尿病を、後者では肥満症とそれに伴う2型糖尿病を専門に扱っている。これらの外来には、栄養士、臨床心理士が臨席し、適宜心理相談・栄養指導を行っている。

入院診療： 入院病棟は10階西病棟が思春期病棟として設定されており、看護師は精神的問題も扱えるよう研修を行っている。10階東病棟も思春期・キャリアオーバーの病棟として同様の研修を施行している。入院患者の疾患は多岐にわたる。各病棟患者の5～20名を担当し、うち約半数が総合診療部としての一般急性疾患、特に専門科にてフォロー中の患者の急性感染症、外科系疾患の内科管理、いわゆる「専門診療のはざま」或いは他科にまたがるため主科の明らかでない慢性疾患、である。このような患者の管理は、国立小児病院時代の解決されなかった問題であり、総合診療部の意義を認識するところである。残りの半数は摂食障害、めまいや微熱の持続などの不定愁訴、肥満症、等である。

性分化異常症ケアチーム： 従来、性分化異常症のケアが診断と身体的治療に偏っていたことを省み、家族を含めた精神面のフォローや法的諸問題の対応をよりスムーズに進めるために、院内にケアチームを立ち上げた。チームは総合診療部思春期診療科、新生児科、内分泌代謝科、泌尿器科、婦人科、遺伝診療科、こころの診療部。出生時に社会的性決定の評価を行い、その後の成長・二次

性徴・妊孕性・社会生活をケアしていく。まさにチーム医療が必要な分野であり、しかも新生児期から成人期までの長い期間を状況に応じて治療していかなければならない疾患群であるため、総合診療部が中心となってコーディネートしていくことは意義があることと思われる。

表 思春期外来（総合診療部）の患者内訳

受診延べ人数		疾患別のべ受診者数			
2002年		AN	17名	Noonan症候群	2名
6月（1）*	1名	肥満	10名	不登校	2名
7月（1）	2名	月経不順	7名	夜尿症	2名
8月（2）	11名	成長障害	7名	CAH	1名
9月（1）	4名	不明熱	8名	高脂血症	1名
10月（1）	6名	2型DM	6名	クレチン症	1名
11月（2）	8名	OD	6名	MR	1名
12月（1）	6名	腹痛	6名	ターナー症候群	1名
2003年		食道アカラシア	5名	Kallmann症候群	1名
1月（1）	3名	無月経	4名	大動脈炎症候群	1名
2月（2）	21名	1型DM	3名	円形脱毛症	1名
3月（2）	18名	性分化異常症（TF）	3名	ムコ多糖症	1名
4月（2）	25名	めまい	2名	過敏性大腸症候群	1名
		不定愁訴	2名	汎下垂体機能低下症	1名
計	105名	貧血	2名		
*（ ）は外来数を示す				合計	105名

(b) 研究活動

思春期診療科では以下のテーマで臨床研究・基礎的研究を行っている。

- 1) 低年齢神経性食欲不振症(AN)の発育環境、成長障害と生化学・内分泌代謝異常の検討
低年齢 AN の成長障害と身体予後を生化学・内分泌データから検討し、予防を考える。
- 2) 肥満の病態：グレリン、レプチンの動態と役割
摂食に関するペプチドやその受容体の検討より、肥満の病因と病態を探る研究
- 3) 疾患をもつ母体から出生した児の予後に関する基礎的・臨床的研究：小児期発症内分泌疾患の妊娠管理と次世代の医療
内分泌疾患、特に性分化成熟異常症における二次性徴と妊孕性、次世代医療についての研究、性分化異常症の診療ガイドライン作成を目指す。

研修

(a) 思春期診療勉強会（毎第1, 3, 5木曜日）

2003年	テーマ	演者
1月23日	思春期の身体発達	堀川（思春期診療科）
2月6日	神経性食欲不振症（1）	生田（思春期心理科）
2月20日	慢性疲労症候群	堀川（思春期診療科）
3月6日	神経性食欲不振症（2）	堀田真理（院外：政策医療大学院大学）
3月20日	自殺	笠原（育児心理科）

(b) 性分化異常症症例検討会（症例があるとき随時、これまでに2回開催）

(c) 2002年8月24日 糖尿病教室：あゆみの会 勉強会

(d) 2002年4月19日 第2回関東甲信越ターナーシンポジウム：ターナー症候群の内分泌合併症

(e) 2002年8月10-11日 小児内分泌サマーセミナー：先天性副腎皮質過形成と急性副腎不全

(f) 2002年8月25日 日本皮膚科学会生涯教育シンポジウム：小児の内分泌代謝異常